

華岡青洲をめぐる「史実」と「虚構」

越智元郎

最近、麻酔科医向けの雑誌で、医学史の専門家（松木明知氏）が、世界に先駆けて全身麻酔による乳がん手術に成功した華岡青洲の、実験に協力して視力を失ったのが、青洲の妻（加恵）でなくその母であったと述べた。名作「華岡青洲の妻」の作者 有吉佐和子が参照した資料のその元資料では、妻が実験に参加したことが「噂」として記載されているに過ぎない。松木氏は青洲が長女妊娠中または乳児として育てている妻に開発中の麻酔薬を服用させることは考えにくく、その後 盲人となった加恵が6人の子どもを生み育てたこともあり得ないという。

有吉の小説はその後 映画化もされたが、青洲を挟む妻と義母の緊張関係と若妻の失明という悲劇性がいまって、人々の心に残る作品となった。私は田辺聖子「ひねくれ一茶」などでもその創作世界を堪能したが、著者の目を通した歴史上の人物の姿とその実情とが必ずしも一致しないことの「ほろ苦さ」を今回感じた次第である。

参考：松木明知 華岡青洲をめぐる「史実」と「虚構」.
Anet Vol.26 No.2 2022 p.42-44

（2022年7月27日にある新聞の読者欄に投稿しましたが、残念ながら不採用でした。）